

小学校教員養成スタンダードに基づく実習到達規準から捉えた実習成果 —実地教育Ⅳ（小学校教育実習）における単位数増加の効果について—

Student Teachers' Outcome Assessed by Attainment Benchmark for Practice Teaching Based on Teacher Standards for Elementary School Teacher Training Program: Focusing on Effects of Increased Credits of Practice Teaching IV

別 惣 淳 二* 長 澤 憲 保**
BESSO Junji NAGASAWA Noriyasu

本研究の目的は、兵庫教育大学学部4年次に応用実習として履修する実地教育Ⅳ（小学校教育実習）の単位数が2単位から3単位に増加したことに伴い、小学校教員養成スタンダードに基づく実地教育Ⅳの実習到達規準を用いて、実習生の資質能力についての到達度評価がどの程度変容し、実習到達規準にどの程度到達しているのかを4年次の実習生と実習指導教諭を対象にした質問紙調査から明らかにすることである。

その結果、実習前と実習後における実習生の到達度評価の変容については、2単位の平成22年度よりも3単位の平成23年度の方がより多くの実習到達規準の項目において実習生の到達度評価が肯定的に変化していることが確認された。また、実習後の実習生の到達度評価については、実習到達規準の項目に関して平成22年度と平成23年度の実習後の到達度評価を比較すると、平成23年度の方が「ある程度身につけている」と「かなり身につけている」に回答した項目数が多く、検定結果においても平成23年度の到達度評価の方が有意に高い項目が多いことが確認された。さらに、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭による実習生の到達度評価を比較した結果、ほとんど差はなかった。このことから、実地教育Ⅳの単位数の増加によって、実習指導教諭による実習生の到達度評価はほとんど差を生じないが、実習生自身の到達度評価を有意に高める効果があることが明らかとなった。

キーワード：小学校教員養成スタンダード、実習到達規準、実地教育Ⅳ（小学校教育実習）、単位数増加、実習成果

Key words : teacher standards for elementary school teacher training program, attainment benchmark, Practice Teaching IV (Practice Teaching at elementary school), increased credits, outcome of practice teaching subjects

I 研究の目的

2006（平成18）年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、「大学の教職課程を『教員として最小限必要な資質能力』を確実に身に付けさせるものに改革する」¹⁾ という方針を掲げ、教職課程の質的水準の向上にむけて教職実践演習の新設・必修化を提言した。ここでの「教員として最小限必要な資質能力」は、「採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」²⁾ と明記されているが、養成段階で最小限必要な資質能力とはどのような資質能力であり、どの程度まで実践できる資質能力を求めているのかは曖昧なままである。また、実際に教員養成を行っている大学・学部において、大学4年間を通して、学生に教員として最小限必要な資質能力がどの程度身についているのかは明らかにされてこなかったこともあり、それを明らかにすることは各大学・学部の喫緊の課題であ

る。

「教員として最小限必要な資質能力」を身につける上で養成段階において最も重要な学修機会を担っているのが教育実習である。しかし、大学4年間の各教育実習科目においてどのような資質能力をどの程度実践できるようになる必要があるのかを示す到達規準は明確にされてこなかった。そのために、実習生の指導を実習校に一任していることが多い教育実習では、実習生への指導目標、指導内容、実習生の成績評価の判定は実習校の指導教諭によって異なるという現実があった。他方、実習生についても、どのような資質能力をどの程度身につけなければならないのかという到達規準がないために、それに照らして自己評価を行う機会がなかった。さらに、教育実習カリキュラムの評価に関しても、各学年で開設されている教育実習科目において実習生にどのような資質能力をどの程度身につけさせなければならないのかを明確にした上で、実習生の到達度を把握しなければ、教員養成

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース 准教授

**兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践開発コース 教授

平成28年4月22日受理

の質を保証したり、「最小限必要な資質能力」を確実に身につけさせるために教育実習カリキュラムを改善したりすることは困難である。

そうした課題から、別惣他は、大学卒業時までには小学校教員として身につけるべき資質能力を示した小学校教員養成スタンダードを開発し³⁾、それに基づいて兵庫教育大学の4年間にわたる実地教育科目(実地教育Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)の実習到達規準を策定してきた⁴⁾。その上で、実際に実習生が実地教育科目を通してどの程度成長し、実習到達規準にどの程度到達できているのか、また、到達するためには事前にどのような能力を身につけておく必要があるのか、さらに実習後には何を学び、何を身につけていきたいと考えているのかを4年次後期に公立小学校で行う2週間の教育実習(実地教育Ⅳ:必修科目)を事例に調査研究を行ってきた⁵⁾。

ところが、兵庫教育大学では平成20年の教育職員免許法施行規則の一部改正を先取りする形で、2008(平成20)年度入学生より学部カリキュラムを改定し、実地教育Ⅳを2単位から3単位にした。教育実習期間の長期化や4年次に主免教育実習の応用あるいは発展としての教育実習を新設するという動きは、近年の国立教員養成系大学・学部の教育実習カリキュラム改革に共通してみられる傾向である⁶⁾⁷⁾。兵庫教育大学の実地教育Ⅳは、学部3年次における4週間の附属幼稚園又は附属小学校での基礎実習を踏まえて履修する応用実習としての意味合いを有しており、実習生の出身小学校で「地域社会と児童又は幼児の実態に応じた教育のあり方について学び、地域社会及び児童又は幼児の実態に応じた教育を実践するとともに、併せて指導方法及び技術を充実させ、教師としての資質を高め、責務を自覚する」ことを目的とした教育実習である。しかし、実地教育Ⅳの実習期間が2週間から3週間になることによって、実習生の教員として必要な資質能力に対する到達度評価がどの程度変化するのは明らかにされていない。それを明らかにすることは、実地教育Ⅳの改善に向けての示唆を得るだけでなく、4年次後期の「教職実践演習」を実施する上で実地教育Ⅳによって実習生が「最小限必要な資質能力」をどの程度身につけていると認識しているのかを把握するためのデータを得ることになると考えられる。

これまでの先行研究を概観すると、大学4年間の教育実習カリキュラムを通して学生の資質能力がどのように変化するのかを把握しようとした調査研究は散見されるが⁸⁾⁹⁾、4年次の教育実習科目の単位数増加によって実習生の小学校教員として必要な資質能力に対する到達度評価がどのように変化するのかを把握した調査研究は管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、小学校教員養成スタンダードに基づく実地教育Ⅳの実習到達規準を用いて、実地教育Ⅳの

単位数が2単位から3単位になったことに伴い、実習生の資質能力の到達度評価がどの程度変容し、実習到達規準にどの程度到達しているのかを4年次の実習生と実習指導教諭を対象に行った質問紙調査をもとに明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 研究の方法

1. 調査対象

2010(平成22)年度の実地教育Ⅳ(2単位)において小学校教育実習を選択した実習生と実習指導教諭、それぞれ125人ずつと、2011(平成23)年度の初等応用実習(実地教育Ⅳ)(3単位)において小学校教育実習を選択した実習生と実習指導教諭、それぞれ131人ずつを調査対象とした。

2. 調査時期

平成22年度の調査時期については、125人の実習生に対して実習前の平成22年6月に「実地教育Ⅳ(小学校実習)の到達規準に関する事前調査」(質問紙調査)を、そして実習後の11月に「実地教育Ⅳ(小学校実習)の到達規準に関する事後調査」(質問紙調査)を実施した。また、実習指導教諭に対しては、実習後の平成22年12月に「教育実習の到達規準に関するアンケート調査」(質問紙調査)を実施した。

平成23年度の調査時期については、131人の実習生に対して実習前の平成23年7月に「初等応用実習(小学校実習)の到達規準に関する事前調査」(質問紙調査)を、そして実習後の11月に「初等応用実習(小学校実習)の到達規準に関する事後調査」(質問紙調査)を実施した。また、実習指導教諭に対しては、実習後の平成23年11月に「初等応用実習の到達規準と到達度に関するアンケート調査」(質問紙調査)を実施した。

3. 実習生に対する調査

調査の実施手続きとしては、平成22年度も平成23年度も事前調査は大学でのオリエンテーション時に学生に一斉配布し、その場で回答を求め、回収した。他方、事後調査については、平成22年度も平成23年度も大学での事後指導の際に学生に一斉配布し、その場で回答を求め、回収した。事前調査と事後調査に回答している実習生のデータ数は、平成22年度が78であり、平成23年度が63であった。

質問紙調査の内容は、平成22年度と平成23年度もともに、小学校教員養成スタンダードに示す「子ども理解力」「子どもに対するコミュニケーション力」「企画・計画力」「学習指導力」「評価力」「学級経営力」「生徒指導力」「教職意識」「自己改善力」「連携・協働」の10領域57項目を用いて、実習生に実習前と実習後の到達度を5件法(1. 身につけていない、2. あまり身につけていない、3. どちらともいえない、4. 少し身につけている、5.

身についている)で回答を求めた。それに加えて、事後調査では、「実習を通じて自分が教師になるために成長したと思うこと」「実習を経験して今後自分が教師になるために学ばべき学修課題であると感じたこと」「実習を経験する前に自分が学んでおくべきだったと感じたこと」について記述方式で回答を求めた。

4. 実習指導教諭に対する調査

実施手続きとしては、平成22年度も平成23年度も実習校の校長を通じて実習指導教諭に質問紙調査への回答を依頼し、回答後各自で返信用封筒を用いて個別に返送する形をとった。実習生のデータと対応している実習指導教諭のデータ数は、平成22年度が78であり、平成23年度が63であった。

質問紙調査の内容は、小学校教員養成スタンダードの10領域57項目を用いて、指導した実習生の到達度を5件法(1. 身についていない、2. あまり身についていない、3. どちらともいえない、4. 少し身についている、5. 身についている)で回答を求めた。

Ⅲ 研究の結果及び考察

1 実習前・後の到達度評価の変化

(1) 実習到達規準ごとにみた実習生の到達度評価の変容

平成22年度と平成23年度の実地教育Ⅳ(小学校教育実習)において、実習生が小学校教員養成スタンダードの57項目に関して実習前と実習後にどの程度到達できているのかを自己評価させ、その結果を平均値で示したものが表1である¹⁰⁾。

表1の平成22年度における実習前と実習後の平均値の差に注目すると、スタンダード1「子ども理解力」では、「5. 子どもの背景にある家庭環境や生育歴から子どもを理解できる」が実地教育Ⅳの実習到達規準の項目ではないが、実習前より実習後の方が値は大きく、5%水準で有意差が認められた。また、実習到達規準に該当する「6. 子どもの個性、性格、人間関係を理解している」については実習前よりも実習後の方が値は大きく、5%水準で有意差が認められた。スタンダード4「学習指導力」では、「18. 単元毎のねらいやその位置づけ、系統性を理解している」「19. 教科毎の指導法・指導技術の知識を持っている」「21. 1時間の授業のねらいを明確にして学習指導ができる」については実習前よりも実習後の方が値は大きく、5%水準で有意差が認められた。また、実習到達規準に該当しない項目であるが、スタンダード10「連携・協働」の「55. 家庭との連携を図り、保護者との信頼関係を持つように

心がける」と「56. 保護者に学校のことを知らせ、理解を求める姿勢がある」については、実習前よりも実習後の方が値が小さく、5%水準で有意差が認められた。このことから、平成22年度の2週間の教育実習では、実習到達規準に該当する項目を見ると、「子ども理解力」「学習指導力」「学級経営力」のスタンダード領域の6項目について、実習前・後の到達度評価に変化が見られた。

他方、平成23年度における実習前と実習後の平均値の差に注目すると、スタンダード1「子ども理解力」では、「1. 子どもの年齢や学年毎の発達段階や特性を理解している」「3. 子どもと接する機会を多く設け、子どもをありのまま理解しようとする」「6. 子どもの個性、性格、人間関係を理解している」の各項目は実習前よりも実習後の方が値が大きく、有意差が認められた。さらに、実習到達規準に該当しないが「5. 子どもの背景にある家庭環境や生育歴から子どもを理解できる」において実習前よりも実習後の方が値が大きく、有意差が認められた。スタンダード2「子どもに対するコミュニケーション力」では、実習到達規準に該当する「7.」～「10.」の4項目は、実習前よりも実習後の方が値は大きく、すべて有意差が認められた。スタンダード3「企画・計画力」において実習到達規準に該当する4項目については、実習前よりも実習後の方が値が大きく、すべて有意差が認められた。スタンダード4「学習指導力」では、「16. 学習指導要領の内容を理解している」を除く12項目において、実習前よりも実習後の方が値が大きく、有意差が認められた。スタンダード5「評価力」では、「32. 授業のねらいに沿って子どもの学習成果を評価できる」の項目において実習前よりも実習後の方が値が大きく、5%水準で有意差が認められた。スタンダード6「学級経営力」においては、実習到達規準の項目ではないが、「34. 学級内での生活や学習のルール設定ができる」は実習前よりも実習後の方が値が大きく、5%水準で有意差が認められた。スタンダード7「生徒指導力」の「38. 生徒指導の目的や方法を理解している」と「39. 子どもの話をよく聞き、子どもの発するサインを読み取れる」の項目は、実習前よりも実習後の方が値が大きく、5%水準で有意差が認められた。スタンダード8「教職意識」では、「41. 教師として適切な言葉遣いができる」「43. 活動を実施するにあたっての安全指導、安全への配慮ができる」「46. 人間的な温かさ、親しみやすさ、ユーモアを持っている」の各項目において、実習前よりも実習後の方が値が大きく、5%水準で有意差が認められた。スタンダード9「自己改善力」では、「50. 授業研究や授業改善の方法を知っている」の項目において、実習前よりも実習後の方が値が大きく、1%水準で有意差が認められた。スタンダード10「連携・協働」では、実習到達規準の項目ではないが、「54. 保護者や同僚教

表1 実地教育Ⅳ（小学校実習）における実習生の自己到達度評価

到達目標の妥当性	平成22年度					平成23年度					平成22年と平成23年との実習後の差	
	実習前		実習後		t検定	実習前		実習後		t検定		
	平均値(SD)	%	平均値(SD)	%		平均値(SD)	%	平均値(SD)	%			
スタンダード1:「子ども理解力」												
*	1.子どもの年齢や学年毎の発達段階や特徴を理解している。	3.26(0.75)	35.9	3.41(0.71)	51.3		3.49(0.72)	54.0	3.79(0.45)	77.8	**	***
**	2.観察や記録などの子どもを客観的に理解する方法を知っている。	3.56(0.73)	55.1	3.55(0.77)	60.2		3.65(0.77)	63.5	3.87(0.52)	78.3		**
**	3.子どもと接する機会を多く設け、子どもをありのまま理解しようとする。	4.05(0.77)	80.8	4.17(0.63)	87.2		4.03(0.78)	82.5	4.35(0.72)	88.9	*	*
**	4.子どもと接する中で、個々の子どもの特性や違いを理解できる。	3.88(0.74)	74.3	3.97(0.56)	85.9		3.86(0.67)	80.9	4.08(0.73)	81.0		*
*	5.子どもの背景にある家庭環境や生育歴から子どもを理解できる。	3.08(0.80)	32.1	3.29(0.82)	44.8	*	3.10(0.95)	34.9	3.62(0.79)	58.7	***	*
*	6.子どもの個性、性格、人間関係を理解している。	3.53(0.77)	55.1	3.73(0.64)	62.9	*	3.56(0.78)	55.5	3.89(0.67)	74.6	**	*
スタンダード2:「子どもに対するコミュニケーション力」												
*	7.その場の状況や子どもの状態にあった対応や指導を冷静に判断できる。	3.44(0.73)	50.0	3.55(0.60)	57.7		3.41(0.87)	42.8	3.79(0.63)	74.6	***	*
**	8.すべての子どもに平等・公平に接することができる。	3.88(0.82)	68.0	3.97(0.79)	74.3		3.97(0.86)	77.8	4.22(0.66)	90.4	*	*
**	9.子どもの話を最後まで聞いて、子どもの気持ちを受け止めることができる。	4.06(0.76)	77.0	4.18(0.66)	85.9		4.02(0.73)	80.9	4.29(0.49)	98.5	**	*
**	10.子どもと対話的なコミュニケーションができる。	4.00(0.72)	79.5	4.14(0.72)	83.4		3.97(0.80)	80.9	4.27(0.63)	90.5	**	*
スタンダード3:「企画・計画力」												
**	11.子どもの実態を踏まえた指導案(板書や発問の計画を含む)を立案できる。	3.37(0.76)	48.8	3.50(0.80)	48.8		3.41(0.84)	55.6	3.75(0.69)	73.0	**	*
**	12.教具やワークシートの準備ができる。	3.71(0.84)	67.9	3.88(0.81)	71.8		3.75(0.90)	66.7	4.16(0.77)	84.6	***	*
**	13.教材研究ができる。	3.60(0.87)	60.2	3.78(0.71)	69.2		3.64(0.94)	65.1	3.86(0.67)	76.2	*	*
*	14.年間指導計画や学期毎の指導計画を念頭に置いて単元計画が立案できる。	2.78(0.78)	15.4	2.83(0.97)	28.2		2.97(0.93)	30.2	3.19(0.74)	32.3		*
*	15.活動のねらいを意識して綿密な計画や準備を行うことができる。	3.29(0.78)	39.7	3.46(0.75)	48.7		3.29(0.87)	42.9	3.73(0.72)	66.7	**	*
スタンダード4:「学習指導力」												
*	16.学習指導要領の内容を理解している。	2.91(0.89)	25.7	2.96(0.78)	25.7		3.10(0.82)	33.3	3.32(0.71)	36.5		**
**	17.各教科内容の知識を持っている。	3.05(0.84)	29.5	3.18(0.68)	32.1		3.00(0.74)	25.4	3.41(0.69)	42.9	***	*
*	18.単元毎のねらいやその位置づけ、系統性を理解している。	2.82(0.86)	21.8	3.06(0.71)	25.6	*	3.03(0.74)	27.0	3.41(0.75)	41.2	**	**
*	19.教科毎の指導法・指導技術の知識を持っている。	2.92(0.82)	23.1	3.13(0.73)	30.8	*	3.10(0.73)	28.6	3.38(0.71)	44.5	*	*
*	20.教育学、心理学などの専門的な基礎知識を持っている。	2.67(0.89)	14.1	2.81(0.76)	17.9		2.81(0.88)	20.6	3.24(0.84)	36.5	**	**
**	21.1時間の授業のねらいを明確にして学習指導ができる。	3.42(0.89)	50.0	3.63(0.71)	60.3	*	3.62(0.77)	61.9	3.91(0.80)	77.7	*	*
*	22.子ども自身が自発的に活動するように指導ができる。	3.36(0.84)	41.1	3.45(0.77)	46.2		3.51(0.82)	57.1	3.78(0.81)	69.9	*	*
**	23.子どもに学習課題を持たせる指導ができる。	3.32(0.88)	46.1	3.45(0.71)	50.0		3.38(0.73)	44.5	3.67(0.74)	57.1	*	*
**	24.授業では準備した教材や教具を有効に使用することができる。	3.46(0.92)	48.7	3.63(0.76)	62.8		3.52(0.76)	55.5	3.87(0.58)	76.2	**	*
*	25.授業のねらいに合った適切な指導法を採用することができる。	3.28(0.82)	43.6	3.35(0.77)	42.3		3.25(0.74)	33.4	3.67(0.72)	61.9	***	*
**	26.授業の中に子どもの活動時間を十分に確保できる。	3.56(0.86)	55.1	3.64(0.84)	64.1		3.65(0.72)	63.5	3.87(0.66)	74.6	*	*
*	27.相互評価や自己評価を通して子どもの評価能力を育てることができる。	3.00(0.72)	21.8	3.12(0.70)	29.5		3.03(0.84)	27.0	3.43(0.71)	42.8	**	**
*	28.子どもに活動のねらいや意義を自覚させることができる。	3.19(0.88)	34.6	3.29(0.67)	41.0		3.25(0.80)	41.3	3.62(0.68)	60.3	**	**
スタンダード5:「評価力」												
*	29.授業評価の目的を理解している。	3.33(0.89)	47.4	3.37(0.82)	41.0		3.56(0.71)	58.8	3.67(0.82)	65.1		*
*	30.ポートフォリオやVTRを活用して授業評価ができる。	2.69(0.96)	17.9	2.56(0.93)	12.9		2.75(0.74)	12.7	2.94(0.86)	27.0		*
*	31.評価の観点をもって客観的に授業評価ができる。	3.04(0.84)	26.9	3.06(0.87)	30.7		3.32(0.84)	42.9	3.49(0.72)	52.4		**
*	32.授業のねらいに沿って子どもの学習成果を評価できる。	3.23(0.84)	38.4	3.28(0.88)	43.6		3.24(0.71)	34.9	3.56(0.69)	53.9	*	*

スタンダード6:「学級経営力」										
33.学級目標を構造化し、設定できる。	3.00(0.93)	33.4	2.85(1.02)	26.9	3.16(0.83)	34.9	3.25(0.72)	34.9		**
34.学級内での生活や学習のルール設定ができる。	3.32(0.96)	47.4	3.22(0.96)	42.3	3.48(0.76)	58.7	3.71(0.66)	66.6	*	***
35.学級内において民主的な機能的集団づくりができる。	3.03(0.88)	28.2	3.03(0.95)	32.0	3.29(0.77)	42.9	3.43(0.73)	44.4		**
* 36.学級内の友だち関係とその性質が把握できる。	3.44(0.89)	50.0	3.73(0.83)	66.7	*	3.73(0.77)	68.2	3.86(0.74)	71.5	
** 37.子どもとの相互理解を通して、信頼関係を築くことができる。	3.53(0.89)	53.8	3.76(0.74)	67.9	*	3.84(0.72)	76.2	3.92(0.63)	79.4	
スタンダード7:「生徒指導力」										
* 38.生徒指導の目的や方法を理解している。	3.29(0.79)	44.9	3.38(0.78)	48.7	3.63(0.73)	63.4	3.83(0.66)	77.8	*	***
** 39.子どもの話をよく聞き、子どもの発するサインを読み取れる。	3.37(0.82)	46.1	3.45(0.70)	51.3	3.49(0.90)	49.2	3.76(0.73)	66.7	*	*
* 40.子どもが自主的・主体的に活動するようにねばり強く指導ができる。	3.59(0.84)	57.7	3.60(0.74)	57.7	3.59(0.78)	58.7	3.71(0.68)	68.2		
スタンダード8:「教職意識」										
** 41.教師として適切な言葉遣いができる。	3.54(0.92)	55.1	3.68(0.81)	62.8	3.49(0.90)	58.7	3.76(0.80)	66.7	*	
** 42.活動では子どもと共に取り組む構えをもって指導にあたる。	3.76(0.69)	66.6	3.88(0.68)	78.2	3.89(0.67)	79.4	4.06(0.72)	84.1		
** 43.活動を実施するにあたっての安全指導、安全への配慮ができる。	3.64(0.74)	59.0	3.72(0.68)	64.1	3.78(0.66)	71.4	3.98(0.61)	81.0	*	*
** 44.教育者としての素直さ、謙虚さ、協調性を持っている。	3.90(0.80)	70.5	3.99(0.66)	78.2	3.94(0.72)	82.6	4.10(0.59)	90.4		
** 45.社会人として常識、ルールを遵守し、適切な言葉遣いができる。	3.77(0.79)	62.8	3.91(0.72)	74.3	3.71(0.75)	71.4	3.86(0.76)	73.1		
** 46.人間的な温かさ、親しみやすさ、ユーモアを持っている。	3.82(0.83)	65.4	3.90(0.86)	75.6	3.81(0.76)	71.4	4.06(0.62)	84.1	*	
** 47.教師としてしっかりとした教育理念や教育観を持っている。	3.45(0.85)	51.3	3.44(0.89)	47.5	3.48(0.82)	50.8	3.70(0.64)	66.6		
** 48.子どもの安全を確保する危機管理意識を持っている。	3.59(0.87)	56.4	3.69(0.71)	60.2	3.71(0.77)	66.7	3.92(0.58)	79.4		*
スタンダード9:「自己改善力」										
* 49.専門的な知識を実践に応用し、そこから学ぶことができる。	3.42(0.83)	47.4	3.47(0.70)	51.2	3.54(0.69)	57.2	3.68(0.56)	66.7		
** 50.授業研究や授業改善の方法を知っている。	3.35(0.84)	43.6	3.40(0.74)	44.8	3.59(0.75)	60.3	3.89(0.51)	84.1	**	***
** 51.授業の反省・分析から次の改善策や課題を提示できる。	3.67(0.86)	65.4	3.72(0.66)	68.0	3.89(0.65)	82.5	4.00(0.60)	82.6		**
** 52.自己研鑽への意欲や向上心を持っている。	3.92(0.99)	69.2	4.08(0.73)	81.0	4.03(0.80)	84.1	4.27(0.70)	88.9		
** 53.教師として自己の行動を客観的に見ることができる。	3.49(0.92)	53.8	3.62(0.76)	55.1	3.70(0.69)	65.0	3.84(0.68)	74.6		
スタンダード10:「連携・協働」										
54.保護者や同僚教師と連携をとり、子どもに冷静な対応ができる。	3.21(0.84)	35.9	3.14(0.94)	39.8	3.33(0.78)	44.5	3.60(0.73)	52.4	*	**
55.家庭との連携を図り、保護者との信頼関係を持つように心がける。	3.31(1.06)	44.9	2.97(1.09)	32.1	*	3.46(0.78)	52.4	3.54(0.80)	55.5	***
56.保護者に学校のことを知らせ、理解を求める姿勢がある。	3.38(0.96)	42.3	3.10(1.03)	34.6	*	3.64(0.73)	60.3	3.62(0.89)	55.6	**
57.PTAや地域の行事に積極的に参加する。	3.32(1.00)	37.2	3.13(1.09)	37.2		3.41(0.73)	42.8	3.46(0.76)	42.8	*

(注1) 平成22年度のデータ数N=78、平成23年度のデータ数N=63である。
 (注2) 表中の平均値は、実地教育Ⅳの事前と事後の到達度として「5. 身についている 4. 少し身についている 3. どちらとも言えない 2. あまり身についていない 1. 身についていない」の5件法の回答を数値とみなして平均した値である。
 (注3) %は、「5. 身についている」と「4. 少し身についている」に回答している割合を示したものである。
 (注4) 項目番号の前の「*」は、実習指導教員が回答した到達目標の妥当性の平均値が3.50以上4.00未満であり、実習到達規準の項目であることを示す。項目番号の前の「**」は、実習指導教員が回答した到達目標の妥当性の平均値が4.00以上であり、実習到達規準の項目であることを示す。
 (注5) t検定の結果は、*: $p < .05$ 、**: $p < .01$ 、***: $p < .001$ を意味する。

師と連携をとり、子どもに冷静な対応ができる」は実習前よりも実習後の方が値が大きく、5%水準で有意差が認められた。このことから、平成23年度の3週間の実習では、実習到達規準の項目についてみれば、「子ども理解力」「子どもに対するコミュニケーション力」「企画・

計画力」「学習指導力」「評価力」「生徒指導力」「教職意識」「自己改善力」の領域の30項目について、実習前と後の到達度評価に有意な変化が見られた。
 以上の結果から、2週間の教育実習を実施した平成22年度よりも3週間の教育実習を実施した平成23年度の方

表2 スタンダード領域からみた実地教育Ⅳ（小学校実習）における実習生の自己到達度評価

	平成22年度					平成23年度					平成22 年と平 成23年 との実 習後の 差
	実習前		実習後		t検定	実習前		実習後		t検定	
	平均値	SD	平均値	SD		平均値	SD	平均値	SD		
スタンダード1:「子ども理解力」	3.56	0.56	3.69	0.44	*	3.61	0.58	3.93	0.46	***	**
スタンダード2:「子どもに対するコミュニケーション力」	3.85	0.60	3.96	0.51		3.84	0.65	4.14	0.43	***	*
スタンダード3:「企画・計画力」	3.35	0.64	3.49	0.61	*	3.41	0.74	3.74	0.53	***	*
スタンダード4:「学習指導力」	3.15	0.68	3.28	0.50	*	3.25	0.54	3.58	0.49	***	***
スタンダード5:「評価力」	3.07	0.74	3.07	0.72		3.21	0.57	3.41	0.61	*	**
スタンダード6:「学級経営力」	3.26	0.79	3.32	0.73		3.50	0.63	3.63	0.52		**
スタンダード7:「生徒指導力」	3.42	0.72	3.48	0.60		3.57	0.65	3.77	0.57	*	**
スタンダード8:「教職意識」	3.68	0.64	3.78	0.54		3.73	0.57	3.93	0.44	*	
スタンダード9:「自己改善力」	3.57	0.76	3.66	0.58		3.75	0.58	3.94	0.44	*	***
スタンダード10:「連携・協働」	3.30	0.86	3.09	0.90	*	3.46	0.62	3.56	0.66		***

(注1) 平成22年度のデータ数N=78、平成23年度のデータ数N=63である。
 (注2) t検定の結果は、*:p<.05、**:p<.01、***:p<.001を意味する。

が、より多くの実習到達規準の項目について実習生の到達度評価が肯定的に変化していることが明らかとなった。つまり、3週間の教育実習の方が、実習生の小学校教員としての資質能力形成という点でいえば、効果的であることがいえる。

(2) スタンダード領域からみた実習生の到達度評価の変容

さらに、平成22年度と平成23年度の実習生の到達度評価を10のスタンダード領域から把握するために、領域毎に構成項目の合成得点(平均値)を算出し、その結果を示したものが表2である。

実習前・後の到達度評価の差については、平成22年度では「子ども理解力」「企画・計画力」「学習指導力」「連携・協働」¹¹⁾において5%水準で有意差が得られているが、平成23年度では、「子ども理解力」「子どもに対するコミュニケーション力」「企画・計画力」「学習指導力」において0.1%水準で有意差が得られ、さらに「評価力」「生徒指導力」「教職意識」「自己改善力」においても5%水準で有意差が得られた。このことから、スタンダード領域から見ても、平成23年度の3週間の教育実習は、実習生の到達度評価に与える影響が大きかったことを示している。

2 実習後における実習生の到達度評価

(1) 実習到達規準からみた実習後の到達度評価

また、平成22年度と平成23年度の実習生が実地教育Ⅳ(小学校教育実習)の実習到達規準についてどの程度到達できているかを把握するために、表1の「実習後」の到達度評価の平均値に注目したい。ここでは、小学校教員養成スタンダードの10領域57項目について平均値を算出し、平均値が3.50以上で、なおかつ「5. 身についている」と「4. 少し身についている」に回答している割合が50%以上であれば、「ある程度身についている」項目であると判断できると考えた¹²⁾。また、平均値が4.00以上で、なおかつ「5. 身についている」と「4. 少し

身についている」に回答している割合が80%以上であれば、「かなり身についている」項目であると判断できると考えた。

まず、平成22年度の「実習後」の平均値と「5. 身についている」と「4. 少し身についている」に回答している割合に注目すると、実習到達規準として項目の前に「**」あるいは「*」を付している47項目のうち、平均値3.50以上かつ回答割合50%以上であった項目は26項目(55.3%)であり、逆にそれ以外の21項目は3.50以下の平均値を示した。さらに、「**」を付した必ず身につける必要があることを意味する28項目の実習到達規準に関して、平均値4.00以上かつ回答割合80%以上を示した項目は4項目に過ぎなかった。

次に、平成23年度の「実習後」の平均値と「5. 身についている」と「4. 少し身についている」に回答している割合に注目すると、実習到達規準として項目の前に「**」あるいは「*」を付した47項目のうち、平均値3.50以上かつ回答割合50%以上であった項目は、40項目(85.1%)であった。さらに、「**」を付した必ず身につける必要があることを意味する28項目の実習到達規準に関して、平均値4.00以上かつ回答割合80%以上を示した項目は11項目であった。このことから、実習到達規準の項目について平成22年度と平成23年度の実習後の到達度評価を比較すると、「ある程度身についている」と「かなり身についている」と評価できる項目数は、平成23年度の方が多いといえる。

また、表1に示すように、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価についてt検定を施した結果、57項目中36項目で有意差が認められた。そのうち、実習到達規準に該当する項目については26項目に有意差が認められた。

以上の結果から、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価を比較すると、平成23年度の方が有意に高

表3 実地教育Ⅳ（小学校実習）における実習生と実習指導教諭の到達度評価

到達目標の妥当性	平成22年度					平成23年度					22年と23年の指導教諭の評価の差
	実習生		実習指導教諭		t検定	実習生		実習指導教諭		t検定	
	平均値(SD)	%	平均値(SD)	%		平均値(SD)	%	平均値(SD)	%		
スタンダード1:「子ども理解力」											
*	1.子どもの年齢や学年毎の発達段階や特徴を理解している。	3.41(0.71)	51.3	3.68(0.75)	65.4	*	3.79(0.45)	77.8	3.98(0.77)	80.9	*
**	2.観察や記録などの子どもを客観的に理解する方法を知っている。	3.55(0.77)	60.2	3.92(0.79)	76.9	**	3.87(0.52)	78.3	3.91(0.87)	77.8	
**	3.子どもと接する機会を多く設け、子どもをありのまま理解しようとする。	4.17(0.63)	87.2	4.31(0.73)	91.0		4.35(0.72)	88.9	4.22(0.92)	80.9	
**	4.子どもと接する中で、個々の子どもの特性や違いを理解できる。	3.97(0.56)	85.9	3.96(0.75)	75.7		4.08(0.73)	81.0	4.05(0.77)	84.1	
	5.子どもの背景にある家庭環境や生育歴から子どもを理解できる。	3.29(0.82)	44.8	2.82(0.75)	14.1	***	3.62(0.79)	58.7	2.79(0.74)	9.5	***
*	6.子どもの個性、性格、人間関係を理解している。	3.73(0.64)	62.9	3.49(0.72)	53.8	*	3.89(0.67)	74.6	3.64(0.77)	66.6	
スタンダード2:「子どもに対するコミュニケーション力」											
*	7.その場の状況や子どもの状態にあった対応や指導を冷静に判断できる。	3.55(0.60)	57.7	3.72(0.64)	64.1		3.79(0.63)	74.6	3.60(0.75)	68.3	
**	8.すべての子どもに平等・公平に接することができる。	3.97(0.79)	74.3	4.09(0.84)	80.7		4.22(0.66)	90.4	4.08(0.83)	76.2	
**	9.子どもの話を最後まで聞いて、子どもの気持ちを受け止めることができる。	4.18(0.66)	85.9	4.04(0.78)	78.2		4.29(0.49)	98.5	4.00(0.81)	85.7	
**	10.子どもと対話的なコミュニケーションができる。	4.14(0.72)	83.4	4.12(0.76)	85.9		4.27(0.63)	90.5	4.32(0.74)	90.4	
スタンダード3:「企画・計画力」											
**	11.子どもの実態を踏まえた指導案(板書や発問の計画を含む)を立案できる。	3.50(0.80)	48.8	3.65(0.79)	69.2		3.75(0.69)	73.0	3.75(0.76)	68.3	
**	12.教具やワークシートの準備ができる。	3.88(0.81)	71.8	4.01(0.73)	79.5		4.16(0.77)	84.6	3.95(0.85)	74.6	
**	13.教材研究ができる。	3.78(0.71)	69.2	4.00(0.76)	84.6		3.86(0.67)	76.2	4.02(0.75)	82.5	
	14.年間指導計画や学期毎の指導計画を念頭に置いて単元計画が立案できる。	2.83(0.97)	28.2	3.14(0.94)	37.1	*	3.19(0.74)	32.3	3.14(0.76)	28.6	
*	15.活動のねらいを意識して綿密な計画や準備を行うことができる。	3.46(0.75)	48.7	3.65(0.80)	61.5		3.73(0.72)	66.7	3.57(0.84)	57.1	
スタンダード4:「学習指導力」											
*	16.学習指導要領の内容を理解している。	2.96(0.78)	25.7	3.42(0.71)	43.6	***	3.32(0.71)	36.5	3.59(0.78)	55.5	*
**	17.各教科内容の知識を持っている。	3.18(0.68)	32.1	3.64(0.76)	59.0	***	3.41(0.69)	42.9	3.68(0.80)	57.2	*
*	18.単元毎のねらいやその位置づけ、系統性を理解している。	3.06(0.71)	25.6	3.26(0.69)	33.4		3.41(0.75)	41.2	3.40(0.79)	47.7	
*	19.教科毎の指導法・指導技術の知識を持っている。	3.13(0.73)	30.8	3.35(0.74)	39.7		3.38(0.71)	44.5	3.48(0.80)	52.3	
*	20.教育学、心理学などの専門的な基礎知識を持っている。	2.81(0.76)	17.9	3.41(0.80)	41.1	***	3.24(0.84)	36.5	3.43(0.73)	49.2	
**	21.1時間の授業のねらいを明確にして学習指導ができる。	3.63(0.71)	60.3	3.97(0.70)	82.0	**	3.91(0.80)	77.7	4.16(0.72)	84.1	
*	22.子ども自身が自発的に活動するように指導ができる。	3.45(0.77)	46.2	3.68(0.75)	64.1		3.78(0.81)	69.9	3.73(0.92)	68.3	
**	23.子どもに学習課題を持たせる指導ができる。	3.45(0.71)	50.0	3.81(0.69)	70.5	**	3.67(0.74)	57.1	3.79(0.77)	71.4	
**	24.授業では準備した教材や教具を有効に使用することができる。	3.63(0.76)	62.8	4.04(0.71)	84.6	***	3.87(0.58)	76.2	4.06(0.80)	81.0	
*	25.授業のねらいに合った適切な指導法を採用することができる。	3.35(0.77)	42.3	3.78(0.80)	68.0	***	3.67(0.72)	61.9	3.70(0.75)	65.1	
**	26.授業の中に子どもの活動時間を十分に確保できる。	3.64(0.84)	64.1	3.86(0.73)	73.1		3.87(0.66)	74.6	3.81(0.88)	74.6	
*	27.相互評価や自己評価を通して子どもの評価能力を育てることができる。	3.12(0.70)	29.5	3.23(0.77)	37.2		3.43(0.71)	42.8	3.19(0.74)	34.9	
*	28.子どもに活動のねらいや意義を自覚させることができる。	3.29(0.67)	41.0	3.54(0.75)	51.3	*	3.62(0.68)	60.3	3.60(0.66)	65.1	
スタンダード5:「評価力」											
*	29.授業評価の目的を理解している。	3.37(0.82)	41.0	3.55(0.78)	56.4		3.67(0.82)	65.1	3.52(0.76)	55.5	
*	30.ポートフォリオやVTRを活用して授業評価ができる。	2.56(0.93)	12.9	3.09(0.71)	21.8	***	2.94(0.86)	27.0	3.00(0.60)	15.9	
*	31.評価の観点をもって客観的に授業評価ができる。	3.06(0.87)	30.7	3.50(0.85)	51.3	**	3.49(0.72)	52.4	3.44(0.76)	50.8	
*	32.授業のねらいに沿って子どもの学習成果を評価できる。	3.28(0.88)	43.6	3.63(0.78)	60.3	**	3.56(0.69)	53.9	3.64(0.77)	61.9	

スタンダード6:「学級経営力」

33.学級目標を構造化し、設定できる。	2.85(1.02)	26.9	3.04(0.71)	16.7		3.25(0.72)	34.9	3.00(0.72)	15.9	*
34.学級内での生活や学習のルール設定ができる。	3.22(0.96)	42.3	3.32(0.76)	38.4		3.71(0.66)	66.6	3.30(0.82)	39.7	**
35.学級内において民主的な機能的集団づくりができる。	3.03(0.95)	32.0	3.29(0.71)	33.3	*	3.43(0.73)	44.4	3.24(0.78)	33.4	
* 36.学級内の友だち関係とその性質が把握できる。	3.73(0.83)	66.7	3.59(0.73)	52.6		3.86(0.74)	71.5	3.71(0.87)	68.3	
** 37.子どもとの相互理解を通して、信頼関係を築くことができる。	3.76(0.74)	67.9	3.90(0.80)	69.3		3.92(0.63)	79.4	4.03(0.76)	82.5	

スタンダード7:「生徒指導力」

* 38.生徒指導の目的や方法を理解している。	3.38(0.78)	48.7	3.51(0.77)	56.4		3.83(0.66)	77.8	3.60(0.68)	57.1	
** 39.子どもの話をよく聞き、子どもの発するサインを読み取れる。	3.45(0.70)	51.3	3.77(0.72)	69.2	**	3.76(0.73)	66.7	3.81(0.80)	71.5	
* 40.子どもが自主的・主体的に活動するようにねばり強く指導ができる。	3.60(0.74)	57.7	3.74(0.73)	60.3		3.71(0.68)	68.2	3.59(0.78)	58.7	

スタンダード8:「教職意識」

** 41.教師として適切な言葉遣いができる。	3.68(0.81)	62.8	4.14(0.82)	84.6	***	3.76(0.80)	66.7	4.08(0.90)	77.8	*
** 42.活動では子どもと共に取り組む構えをもって指導にあたれる。	3.88(0.68)	78.2	4.29(0.74)	89.7	***	4.06(0.72)	84.1	4.27(0.77)	80.9	
** 43.活動を実施するにあたっての安全指導、安全への配慮ができる。	3.72(0.68)	64.1	3.91(0.72)	75.6		3.98(0.61)	81.0	3.84(0.81)	68.2	
** 44.教育者としての素直さ、謙虚さ、協調性を持っている。	3.99(0.66)	78.2	4.36(0.74)	91.0	***	4.10(0.59)	90.4	4.33(0.92)	85.7	
** 45.社会人として常識、ルールを遵守し、適切な言葉遣いができる。	3.91(0.72)	74.3	4.35(0.75)	89.7	***	3.86(0.76)	73.1	4.13(1.02)	80.9	
** 46.人間的な温かさ、親しみやすさ、ユーモアを持っている。	3.90(0.86)	75.6	4.21(0.80)	83.3	*	4.06(0.62)	84.1	4.18(0.83)	79.4	
** 47.教師としてしっかりとした教育理念や教育観を持っている。	3.44(0.89)	47.5	3.91(0.86)	70.5	***	3.70(0.64)	66.6	3.86(0.88)	66.7	
** 48.子どもの安全を確保する危機管理意識を持っている。	3.69(0.71)	60.2	3.63(0.74)	57.7		3.92(0.58)	79.4	3.73(0.83)	58.7	

スタンダード9:「自己改善力」

49.専門的な知識を実践に応用し、そこから学ぶことができる。	3.47(0.70)	51.2	3.67(0.80)	59.0		3.68(0.56)	66.7	3.68(0.80)	57.2	
** 50.授業研究や授業改善の方法を知っている。	3.40(0.74)	44.8	3.73(0.75)	67.9	**	3.89(0.51)	84.1	3.79(0.83)	63.5	
** 51.授業の反省・分析から次の改善策や課題を提示できる。	3.72(0.66)	68.0	4.09(0.78)	83.3	**	4.00(0.60)	82.6	4.05(0.79)	81.0	
** 52.自己研鑽への意欲や向上心を持っている。	4.08(0.73)	81.0	4.33(0.72)	92.3	*	4.27(0.70)	88.9	4.22(0.77)	82.6	
** 53.教師として自己の行動を客観的に見ることができる。	3.62(0.76)	55.1	4.05(0.70)	80.7	***	3.84(0.68)	74.6	3.94(0.90)	68.3	

スタンダード10:「連携・協働」

54.保護者や同僚教師と連携をとり、子どもに冷静な対応ができる。	3.14(0.94)	39.8	3.37(0.79)	41.0		3.60(0.73)	52.4	3.37(0.92)	50.8	
55.家庭との連携を図り、保護者との信頼関係を持つように心がける。	2.97(1.09)	32.1	2.91(0.76)	12.8		3.54(0.80)	55.5	2.91(0.69)	12.7	***
56.保護者に学校のことを知らせ、理解を求める姿勢がある。	3.10(1.03)	34.6	2.90(0.78)	11.6		3.62(0.89)	55.6	2.91(0.71)	12.7	***
57.PTAや地域の行事に積極的に参加する。	3.13(1.09)	37.2	3.04(0.89)	19.2		3.46(0.76)	42.8	3.14(0.82)	28.6	*

(注1) 平成22年度のデータ数N=78、平成23年度のデータ数N=63である。
 (注2) 表中の平均値は、実地教育Ⅳの事前と事後の到達度として「5. 身についている 4. 少し身についている 3. どちらとも言えない 2. あまり身についていない 1. 身についていない」の5件法の回答を数値とみなして平均した値である。
 (注3) %は、「5. 身についている」と「4. 少し身についている」に回答している割合を示したものである。
 (注4) 項目番号の前の「*」は、実習指導教員が回答した到達目標の妥当性の平均値が3.50以上4.00未満であり、実習到達規準の項目であることを示す。項目番号の前の「**」は、実習指導教員が回答した到達目標の妥当性の平均値が4.00以上であり、実習到達規準の項目であることを示す。
 (注5) t検定の結果は、*:p<.05、**:*p<.01、***:p<.001を意味する。

い自己評価が得られていた。

しかし、平成23年度は平成22年度よりも高い自己評価が得られたが、実地教育Ⅳの実習到達規準として項目の前に「*」を付した項目において、平均値3.50以上かつ

回答割合50%以上の到達度評価を示していない項目は、スタンダード4「学習指導力」の「16. 学習指導要領の内容を理解している」「18. 単元毎のねらいやその位置づけ、系統性を理解している」「19. 教科毎の指導法・

指導技術の知識を持っている」「20. 教育学、心理学などの専門的な基礎知識を持っている」、「27. 相互評価や自己評価を通して子どもの評価能力を育てることができる」、そして、スタンダード5「評価力」の「31. 評価の観点をもって客観的に授業評価ができる」の6項目であった。これらの項目は、「ある程度身につけている」と自己評価できる状態に達していない実習生が多いことから、実習後に「ある程度身につけている」といえる状態に達することが実地教育Ⅳの課題である。

また、平成23年度のもう一つの課題は、項目の前に「**」を付した項目について、実習後に平均値4.00以上かつ回答割合80%以上に達していない項目が多かったことである。その項目が多かったスタンダードの領域は、スタンダード4「学習指導力」（「17. 各教科内容の知識を持っている」、「21. 1時間の授業のねらいを明確にして学習指導ができる」、「23. 子どもに学習課題を持たせる指導ができる」、「24. 授業では準備した教材や教具を有効に使用することができる」、「26. 授業の中に子どもの活動時間を十分に確保できる」）、スタンダード8「教職意識」（「41. 教師として適切な言葉遣いができる」、「43. 活動を実施するにあたっての安全指導、安全への配慮ができる」、「45. 社会人として常識、ルールを遵守し、適切な言葉遣いができる」、「47. 教師としてしっかりとした教育理念や教育観を持っている」、「48. 子どもの安全を確保する危機管理意識を持っている」）、スタンダード3「企画・計画力」（「11. 子どもの実態を踏まえた指導案（板書や発問の計画を含む）を立案できる」、「13. 教材研究ができる」）、スタンダード9「自己改善力」（「50. 授業研究や授業改善の方法を知っている」、「53. 教師として自己の行動を客観的に見ることができる」）であった。こうしたスタンダードの項目の到達度評価を、実習後に「かなり身につけている」と評価できる状態に高めていくことが今後の課題として求められる。

（2）スタンダード領域からみた実習後の到達度評価

さらに、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価の差異をスタンダード領域の観点から把握するために、表2の「実習後」の到達度評価の平均値に注目したい。

平成22年度の実習後の到達度評価において比較的高い平均値が得られたスタンダードの領域は、「子どもに対するコミュニケーション力」（3.96）、「教職意識」（3.78）、「子ども理解力」（3.69）、「自己改善力」（3.66）であった。また、平成23年度の実習後の到達度評価において比較的高い平均値が得られたスタンダードの領域は、「子どもに対するコミュニケーション力」（4.14）、「自己改善力」（3.94）、「子ども理解力」（3.93）、「教職意識」（3.93）であった。したがって、平成22年度と平成23年度では、実地教育Ⅳの終了後に、4つのスタンダード領域の資質能

力を身に付けたと認識している学生を養成できているものと考えられる。

その上で、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価を比較すると、全てのスタンダード領域において平成23年度の方が「実習後」の平均値が高く、「教職意識」以外のスタンダード領域で有意差が認められた。

これらの結果から、実地教育Ⅳの単位数の増加により、スタンダード領域からみても実習生の小学校教員養成スタンダードの項目に対する自己評価が高まっていることが明らかとなった。

3 実習後における実習生と実習指導教諭の到達度評価

平成22年度と平成23年度の実習後における実習生自身の到達度評価をより客観的に捉えるために、実習後の実習指導教諭による実習生の到達度評価と比較した結果を示したものが表3である。

まず、平成22年度の結果から見ると、実習生よりも実習指導教諭の方が有意に高い到達度評価を示した項目は、(1)、(2)、(14)、(16)、(17)、(20)、(21)、(23)、(24)、(25)、(28)、(30)、(31)、(32)、(35)、(39)、(41)、(42)、(44)、(45)、(46)、(47)、(50)、(51)、(52)、(53)であり、逆に実習生よりも実習指導教諭の方が有意に低い到達度評価を示した項目は、(5)、(6)であった。実習指導教諭による実習生の到達度評価において3.50以上の平均値を示した項目は、実地教育Ⅳの実習到達規準に該当する47項目のうち40項目（85.1%）であった。このことから、平成22年度では、実習後の実習生自身の到達度評価よりも実習指導教諭の到達度評価の方が有意に高く評価している項目が多いことが理解できる。

一方、平成23年度の結果を見ると、実習生よりも実習指導教諭の方が有意に高い到達度評価を示した項目は、(16)、(17)、(41)であった。逆に実習生よりも実習指導教諭の方が有意に低い到達度評価を示した項目は、(5)、(33)、(34)、(55)、(56)、(57)であり、いずれの項目も実地教育Ⅳの実習到達規準に該当しない項目であった。実習指導教諭による実習生の到達度評価において3.50以上の平均値を示した項目は、実地教育Ⅳの実習到達規準に該当する47項目中、41項目（87.2%）であった。つまり、実地教育Ⅳの実習到達規準の項目について言えば、実習生自身の到達度評価と実習指導教諭の到達度評価では、有意差が得られた項目は多くはなく、双方の到達度評価に差が少ないことが言える。

さらに、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭による到達度評価の差を見た結果、「(1)子どもの年齢や学年毎の発達段階や特徴を理解している」のみ5%水準で有意差が認められた。このことから、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭による実習生の到達度評価を比較すると、ほとんど差がないことが明らかとなった。

以上のように、平成22年度と平成23年度における実習

生自身の到達度評価と実習指導教諭による実習生の到達度評価を比較した結果、実地教育Ⅳの単位が2単位から3単位に増加し、実習期間が2週間から3週間になることによって、実習指導教諭による実習生の到達度評価にほとんど差異は生じないが、実習生自身の到達度評価を高める効果があることが明らかになった。

Ⅳ まとめ

本稿では、兵庫教育大学学部4年次生が応用実習として履修する実地教育Ⅳ（小学校教育実習）の単位数が2単位から3単位に増加したことによって、小学校教員養成スタンダードに基づく実地教育Ⅳの実習到達規準を用いて、実習生の資質能力についての到達度評価がどの程度変容し、実習到達規準にどの程度到達しているのかを明らかにするために、4年次の実習生と実習指導教諭を対象に実施した質問紙調査の結果から検討した。

その結果、実習前・後の実習生の到達度評価の変容については、2単位の教育実習を実施した平成22年度よりも3単位の教育実習を実施した平成23年度の方が、より多くの実習到達規準の項目において実習生の到達度評価が肯定的に変化していることが確認された。

また、実習後における実習生の到達度評価については、実習到達規準に該当する項目において平成22年度と平成23年度の実習後の到達度評価を比較すると、「ある程度身につけている」や「かなり身につけている」の状態に達している項目数が平成23年度の方が多かった。このことと関連して、平成22年度と平成23年度の事後の到達度評価についてt検定を施した結果、平成23年度の到達度評価の方が有意に高いことが認められた。

しかし、実習生の到達度評価が高い平成23年度において、到達することが望ましいとする実習到達規準の項目でも、「学習指導力」や「評価力」に該当する6項目については、実習後に「ある程度身につけている」といえる状態に達していない実習生が多いことが確認された。また、必ず達成することが求められるとする実習到達規準の項目でも、「学習指導力」「教職意識」「企画・計画力」「自己改善力」等に該当する17項目については、実習生が「かなり身につけている」と評価できる状態に達していないことが確認された。これらの項目が実習後に「ある程度身につけている」や「かなり身につけている」と評価できる状態に達するように、実地教育Ⅳの実習を改善することが課題である。

さらに、実習後の実習生と実習指導教諭の到達度評価については、平成22年度では実習生の到達度評価よりも実習指導教諭の到達度評価の方が高く評価している項目が多いが、平成23年度では実習生の到達度評価よりも実習指導教諭の到達度評価の方が高く評価している項目が少なくなる。そして、平成22年度と平成23年度の実習指

導教諭による到達度評価に差はほとんどなかった。

このことから、実地教育Ⅳの単位数が2単位から3単位になることによって、実習指導教諭の到達度評価にはほとんど差を生じさせないが、実習生自身の到達度評価を有意に高める効果があることが明らかになった。

このことは、実地教育Ⅳの単位数が増加することによって、実習指導教諭の到達度評価には差が生じなかったが、実地教育Ⅳの3週間化は、2週間の実習よりも実習生が小学校教員としての資質能力を身につけるための自信や達成感を高める上で有効であったことを示しているのではないかと考えられる。そうであるならば、卒業前の4年次に3週間の教育実習を行うことによって、実習生は2週間の実習を行うよりも、どのような資質能力に関する自信や達成感を高めることができたと思うか、それは何が原因で高めることができたのかを、さらに明らかにしていきたいと考えている。

註

- 1) 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」、2006年。
- 2) 同書
- 3) 本研究で用いた小学校教員養成スタンダードは10領域57項目からなるものであり、その内容は2007年の論文（別惣淳二・千駄忠至・長澤憲保・加藤久恵・渡邊隆信・上西一郎「卒業時に求められる教師の実践的資質能力の明確化—小学校教員養成スタンダードの開発—」『日本教育大学協会研究年報』第25集、2007年、95-108頁）に掲載されている。その後、兵庫教育大学では、5領域50項目からなる「教員養成スタンダード（小学校版）」（別惣淳二・渡邊隆信編『教員養成スタンダードに基づく教員の質保証』ジアース教育新社、2012年、30-59頁を参照されたい）が開発されている。
- 4) 別惣淳二・渡邊隆信・加藤久恵・長澤憲保・上西一郎・中田高俊「小学校教員養成スタンダードに基づく実習到達基準の開発—4年間の教育実習科目における到達目標の体系化を目指して—」『日本教育大学協会研究年報』第27集、2009年、191-203頁。
- 5) 別惣淳二・渡邊隆信・長澤憲保・加藤久恵・上西一郎・中田高俊「小学校教員養成スタンダードに基づく実習到達基準から捉えた実習成果と課題（Ⅰ）—実地教育Ⅳに注目して—」『兵庫教育大学研究紀要』第34巻、2009年、35-48頁。
- 6) 住野好久・岡野勉・林尚示・濁川明男「国立教員養成系大学・学部における教育実習カリキュラムの系統化に関する研究—教育実習改革の動向調査をふまえて—」『日本教師教育学会年報』第13号、2004年、84-93頁。
- 7) 米沢 崇「我が国における教育実習研究の課題と展

- 望]『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部第57号、2008年、51-58頁。
- 8) 上家 卓・神林 勲・中道莉央・石澤伸弘・中島寿宏・神林裕子・黒河あおい・城後 豊「教員養成系大学の学生における『教員の資質・能力』の推移に関する一考察—主免教育実習および学年進行に着目して—」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第64巻第1号、2013年、323-332頁。
- 9) 深見俊崇「4年間の教育実習プログラムを通しての教員志望学生の資質能力の変化—鳥根大学教育学部の事例—」『鳥根大学教育学部紀要（教育科学）』第47巻、2013年、1-6頁。
- 10) 表1の実習到達規準については、前掲書、別惣・渡邊・加藤・長澤・上西・中田、2009年の研究による。表3の実習到達規準についても同様である。
- 11) 「連携・協働」の5%水準での有意差については、実習前よりも実習後の方が到達度評価の平均値が下がったことによるものであり、実地教育Ⅳによる効果を示すものではない。
- 12) 平均値が3.50以上という基準は、1サンプルのt検定において3.00を検定値にとった場合に0.1%水準で有意であったことも理由の一つである。

謝辞

本研究で用いた質問紙調査の回答にご協力いただきました学部4年次生ならびに実習校の実習指導教諭に心より感謝致します。